



町民文芸

只見短歌会 令和五年十月詠草

子等は皆離れて住めば老一人今日も語ろう事もなく過ぐ
馬場 八智

何処いずこから風導きや我が庭に宿りて和む昼顔の花
目黒 富子

只見線再開通に浮かびくるあの日あの時思ひ出深し
関谷登美子

秋晴れの午後の陽だまり妻と子の寝顔眺めて音立てづをり
立花 奏音

クリームにこだはる母の逝きし後残りを今は我使ひをり
新国由紀子

味噌汁の具の多過ぎと夫つまは言ひ栄養豊富と言葉返しぬ
渡部ヨリ子

こんもりと黄色くなりし栗の葉が一週間経て裸木さびし
故 新国 洋子（遺作）

（出詠順）

只見俳句会 十月定例会

横笛の友思い出す秋祭り
青空にぶなの葉届き孫の声
真理子

立秋や青空に風あたらしく
送り火やくすぶり長し静心
紺 青

声高に座して机上の茸狩
芋掘りて職業欄に農と書き
恒 夫

上手かみてから飲水堀のみずぼり来る水澄めり
筵踏む小豆の莢を爆ぜかせて
礼

剪定の間違いあるや柿一つ
青空や支柱の先々あきあかね
修 一

日高俊平太 指導

ひたすらにただひたすらに赤とんぼ
思い出す母の怒声と雪囲い
信

コーヒーは濃くして熱き秋の朝
球児等の日焼けした顔空高し
都